ひといき

阪大オペラ20周年を顧みて Ⅲ

大川創業株式会社　名誉顧問
阪大オペラ　ディレクター　　大川進一郎

歌手がオペラを何語で歌うかは、演出家の指示によるが、一般的には原語で歌われることが多い。原語とは、脚本家が作曲家に渡す台本に書かれている言語のことである。つまり、台本がドイツ語ならドイツ語のオペラ、イタリア語ならイタリア語のオペラとなる。脚本家は作曲家に台本をドサッと渡し、作曲家は渡された台本に基づいて作曲するのである。台本の様々なシーンを思い浮かべ「ここはこんな感じでテナーにアリアを歌わせよう」。すると、「それに応えるように、はにかみながらソプラノがアリアで応える」。という風に作曲する。シナリオの中の“セリフ”を交わし合うのがお芝居なら、歌で語り合うのが歌劇、つまりオペラである。歌詞をより現代語に近付けて分かり易くしたのがミュージカル、喋らず、無言で踊って表現するのがバレエ、絵で語るのが絵画、絵巻物を歌劇とすれば、一枚の絵は歌曲となる。

交響曲は作曲家だけの隠されたドラマだ。その謎を解き明かすのが観客という名の探偵団で、聞く人によって感じ方が異なる。その点、絵画や写真は動かしがたい証拠をさらけ出して観客の批判を仰ぐ。芸術の中には様々なジャンルのドラマがあるが、音楽はバレエやオペラのように視覚に訴えるものを目に見えない聴覚を通じて人の心に訴えるのである。祭太鼓のように聴覚だけでなく身体全体を響かせると一層心に響く。音楽も音だけでなく、倍音が人に感動を与えるのだ。音楽の他の芸術にない良さは、この倍音だ。レチタティーヴォが歌う筋書きとも言おうか、作曲家も、二時間近くある作品で、アリアだけを作曲するのはネタもないし、困難である。それをやれば、先ず観客が疲れ、飽きてしまうのでオペラにならない。逆に筋書きばかりでもオペラにならない。ここぞ！と思う所でアリアが出ると「待ってました！」とばかりにブラボーと叫びたくなる。そのレチタティーヴォや筋書きは、普通オペラを開催する国の言葉で語られる。

例えば、ヴェルディーの曲なら、作曲されてから50年以上経っているので、著作権使用料を払わなくてもよいが、母国語で歌う筋書き、レチタティーヴォは翻訳してから50年経っていないなら著作権使用料が必要だという事は前にも説明した通り、その邦訳を日本では大体が舞台の上手と下手に字幕柱を立てるのが通例である。子供の頃からオペラに親しむ欧米人は、筋書きを知っているので今更字幕は見ない。筒状に二本立てるより、舞台の奥に字幕を置けば、観客は正面を向いたまま、洋画の字幕を読む形になって非常に読みやすい。そうや！映画のように映像と字幕を使えば、左右にある字幕の塔や3,000万円もする大舞台を製作しなくても十分成り立つ。第17回阪大オペラ「愛の妙薬」は実験的に字幕の下に画像を２枚入れて岩田氏が作ってくれた。新しい事に挑戦したが大成功だった。それに、この「愛の妙薬」は観客の１人で、自宅から会場のコンベンションホールまで徒歩で行ける事もあり、第１回から欠かさず観に来てくれている同窓の大川良樹氏。彼は関西フィルの後援会にも入会、音楽に造詣がある人だ。そんな彼に日頃阪大オペラについて色々なアドバイスを頂くが、この「愛の妙薬」も数年前から一度上演して欲しいと言われていた。オペラの企画は３年位前から立てるので、中々期待に沿えなかったが、丁度17回目の演目に決まったのでホッとした。

阪大オペラに欠かせないオーケストラが大変上手くなったな！という嬉しい声を頂く。私が出演しなくなったというのもその一つだが、上手くなった理由を話そう。これまで再三話してきたように、開かれた大学を示す為に、入場無料、出演料無料ならコンベンションホールを無料で貸すという条件で成り立っている。ノーギャラという事は、約50名のオケメンバーと歌手達にプロを使えない。幸い、私はＡＰＡ（アマチュア演奏家協会）の創立時代からのメンバーで、その中には各地のアマチュアオケに所属しているメンバーもいる。ＡＰＡは入会の時に自分のレベルをＡ～Ｄで自主申告する。Ａは講師クラス、Ｂはソロができる程度、Ｃはソロは無理だが合奏ならできる程度、Ｄは初心者。仮に音大を卒業しても、プロのオケ奏者になるのは至難の業。音大講師も同様。だから、ＡＰＡの会員になって、プロオケのオーディションを目指している。勿論、オケだけではなく、室内楽を楽しみたいという会員もいる。私はＡＰＡの会員で、ピアノ以外のＡ・Ｂクラスの人に呼び掛け、何とか人数を集めてきたが、Ｄクラスの人で入会を希望する人もいるが、下手だからと言って、断るわけにもいかない。弦楽器の場合、合奏だから個々の技量はさほど気にならないが、フルー

ト、オーボエ等の木管楽器、トランペット、ホルン等の金管楽器は音が大きく、変な音を出されると、オケの和音を壊す事になる。トランペットやホルンは、同じ指使いでどんな音域も出せる。つまり、歌のように絶対音感がないと音が定まらない。ピアノやクラリネットは運指表通り指を動かせばほぼ同じ音が出る。最も狂いにくいのはオーボエだから、オーボエのＣ音を基準として、まず演奏前に全員でオーボエのＣ音に合わせる。奏者は大体自分と他人の技量の差がわかるが、中には何とかならんかというひともいて苦労した。出演料は出せないといっても、指揮者はアマチュアでは難しい。オペラをアマチュアが指導、指揮はできない。ギオルギ・バブアゼ氏は指揮者としてだけでなく、技術指導料を支払うことができたのは、APAは申請すれば東京本部から運営費として支援されていたが、オケばかりに運営費が支給されて、我々室内楽の演奏会にも運営費が欲しいという声が出て存続が危うくなった時に、オペラを無料で観れる、なんて勿体ないと喜捨箱設置の話が出て、ひと段落ついた。その時にAPAの会員で阪大卒業生がいて、卒業生が集まって結成した待兼交響楽団というオケがあると教えられ、バブアゼ氏にオペラを教えてもらえるなら、APAのオケを引き継いでもよいと言ってきた。団長も事務局長も積極的だし、会費は全て負担するという有難い話。２年出演して頂いたが、オケの技量はAPAより上だと見るが、待兼交響楽団というだけあって、交響曲は得意のようだが、オペラのように変化の多い演奏は中々難しい。ヴェルディとプッチーニはオペラの両輪のようなもので、「蝶々夫人」「トスカ」「トゥーランドット」など、次に上演したい演目が制限を受けるとぽっかり穴が開いてしまう。泣く泣く待兼交響楽団の起用を２年で断念した。すると、すかさず今のオケでは満足できない、関西のトップクラスの奏者を集めて関西最高のオケを作りたいので相談に乗って欲しいという木管奏者２人が現れた。今の楽団はそのまま存続し、オペラという新しいジャンルに挑戦できるなら喜んで参加したいという。棚からぼた餅とはこのことだろう。流石にトップクラスばかりを集めただけあって、理解力は抜群である。APAの場合、本番当日にプロを入れてゲネプロをやり、やっと出来上がる程度だったのに、この楽団は初日でAPAの本番並の演奏が可能となった。それが、現在のオペラパーク管弦楽団である。Facebook で “オペラパーク管弦楽団　第九” と検索して頂けば、オペラでないので指揮者こそ違うが、プロの演奏と比べても引けを取らない。殊にプロが入った “オペラパーク楽友アンサンブル” で検索して頂くと、既に国際級のウィンナーワルツをニューイヤーコンサートやサマーコンサートでの演奏を Youtube でお楽しみ頂けます。この映像を見たウィーンフィルのメンバーから長男卓也に冷やかしの電話やメールが届くまでに成長した。このウィンナーワルツ、ウィーンフィルと他のオケとの違いは何か？それはリズムである。ヨーロッパのワルツはズンチャッチャで３拍子。この３拍目のチャを少し長く演奏する。ところが、日本だとズンチャッチャのズンが強、後のチャッチャは弱弱、つまり強弱弱となる。欧米では、最初の１拍目のズンは弱で、２拍目も弱、３拍目は強。ウィンナーワルツは２拍目で女性ダンサーを持ち上げるが重いので、２拍目の前に持ち上げる為２拍目が早くなってしまう。その持ち上げたダンサーを降ろすのにドンと降ろすとまるで落としたようになり、ケガをする。だからそっと降ろすと３拍目の中頃になるという訳だ。だから、ウィンナーワルツはズ・チャアアン･チャと２拍目は早く、３拍目は遅く着地するように演奏しなければならない。ところが、オペラパーク楽友アンサンブルのホルン奏者は、一度ウィンナーワルツのリズムを覚えてしまうと、そのリズムを分からない指揮者が俺の棒のリズムで吹いてくれと言っても、そう簡単に体で覚えたリズムを変えられない。第２ヴァイオリン・ヴィオラ奏者もホルンに合わせるようになったので、ウィンナーワルツを演奏させればピカイチだ。うちの長男は日本シュトラウス協会主催のコンサートをはじめ、日本全国のオケから小太鼓での出演依頼があるようだ。また、今年３月、ウィーン学友協会で「ベートーヴェン生誕250周年記念　第九特別記念コンサート」にも出演予定だったが、生憎新型コロナウイルス感染予防の為延期となった。この他、ニューイヤーコンサートは、アンコール「美しき青きドナウ」の後、小太鼓ソロで始まるＪシュトラウスⅡの父が作曲した「ラデッキー行進曲」で幕を閉じる。こうした演奏の為、ウィーンフィルの首席奏者に直接レッスンを受けにドイツやオーストリアまで飛んでいく。私も若かりし頃、ウィーンフィルの首席奏者アルフレッド・プリンツ氏の音色に惚れ込み、ウィーンまで出掛けたが、息子も親父と同じ事をしている。親子とは不思議なものだ。

将来的に賛同される方があれば、阪大オペラを「全曲２時間」上演をやめて、第１部を「オペラ　アリア集」、第２部を「来年のニューイヤーコンサートはこれだ！」と銘打って、ニューイヤーコンサートを半年前にコンベンションホールで上演してはどうかという構想をもっている。

今日まで阪大オペラを続けてこられたのも、偏に大阪大学工業会および工学研究科のご支援があってのことと感謝している。

（電気　昭和32年卒）